



平成 29 年 10 月 26 日

本 社 所 在 地 東京都港区赤坂三丁目 7 番 13 号
会 社 名 株式会社アエリア
代表者の役職名 代表取締役社長 小林祐介
(コード番号：3758)
問 合 せ 先 管理本部長 上野哲郎
電 話 番 号 03-3587-9574
(URL <http://www.aeria.jp/>)

当社に関する一部レポートに対する弊社見解について

本日「当社に関する一部レポートについて」で公表いたしました、ウェル・インベストメンツ・リサーチ社（以下、ウェル社）の調査レポートにつきまして、当社の見解をお知らせいたします。

1. 当社連結子会社である株式会社リベル・エンタテインメント（以下、リベル社）に関する見解について

(1) リベル社『A3!』のダウンロード数（以下、DL）について

ウェル社の主張によると「リセットマラソン」（以下、リセマラ）を積極的に用いて DL を誇張しているという指摘がございますが、リベル社はリセマラを推奨していません。

配信サービス開始時に新規 DL とリセマラ DL が重なるとサーバーに負荷が掛かりシステムダウンを起こす可能性があります。配信サービス開始直後のシステムダウンはユーザー獲得の障害になりユーザー評価のマイナスとなるため最も懸念している点でございます。

リセマラでも DL された事実が変わりありませんので DL 数として公表しておりますが、リセマラが多数あることは、ユーザーの熱量が大きく優良なコンテンツの証明であると考えておりますので、ウェル社の主張は正当ではありません。

(2) 『A3!』が表面的な人気で成長がないことが明らかという主張について

『A3!』につきましては、リベル社の主力タイトルであり今後とも息の長いコンテンツに育てていく方針です。2017 年 6 月 9 日に iOS セールスランキング 2 位を獲得し、その後毎月コンスタントにセールスランキングのシングルに入っておりますので、表面的な人気だけでは獲得できないセールスランキングとなっております。

(3) 『A3!』は既に業績のピークを過ぎているという主張について

女性向けゲームは、男性向けのタイトルとは違い、ゲームアプリ以外の部分、リベル社では周辺事業と言います（CD、カラオケ、グッズ、コンビニ、イベント、舞台、書籍）をゲームと同時展開することによりユーザーの離脱率を抑えてタイトル価値を上げております。

現状の周辺事業についてパートナー様の反響を一部ですがご紹介させていただきます。

[音楽パートナー：(株)ポニーキャニオン様]

今年の 1 月にリリースしたオリジナルのゲームタイトルですが、その後発売したミニアルバムについて CD が売れない時代にすべてオリコンウィークリーランキング 5 位以内に入るといった驚異的な数字を出しております。

また、10 月 28 日に開催される『A3!』初のファンミーティングチケットが完売し、急遽用意したライブビューイングでもチケットが取れないなど、ユーザーの熱量の大きさを示しております。

今後もリベル社にて全社的にバックアップさせていただきます。

[コンビニ展開：(株)U F I F U T E C H 様 (旧社名：株式会社ファミマ・ドット・コム)]

ファミリーマート店内のデジタルプリントで出力されるブロマイドで、『A3!』は過去最高の売上を記録しています。

[グッズ展開：榊ムービック様]

11月3日に池袋で開催されるAGF(アニメイトガールズフェスティバル)において『A3!』及び『アイ★チュウ』を出展します。今回、『A3!』及び『アイ★チュウ』を合わせた物販販売金額が過去最高であるというご報告をいただいております、売場対応も着実に進んでいく旨コメントも頂いております。

なお、AGFのグッズに関しましては通販での発売を予定しています。

リベル社の周辺事業につきましては、パートナー様について実績のある大手企業を優先的に起用しタイトル認知度の拡大を目指しております。

(4) 『アイ★チュウ』 関する主張について

『アイ★チュウ』は、リベル社第一弾の自社タイトルとして2015年6月26日に配信サービスを開始いたしました。その後、2015年8月27日にiOSセールスランキング30位を獲得し、累計売上20億円を越すタイトルに成長をしております。

『アイ★チュウ』のヒットにより、アプリ開発・運営・プロモーション・海外展開・周辺事業のノウハウを取得し、『A3!』の大ヒットに繋がりました。

『アイ★チュウ』の中国展開に関しましては、収益の底上げになっていないという主張がありますが、大ヒットはしていないものの、契約時のMG(ミニマムギャランティー)やロイヤリティーの受領により収益貢献をしております。さらに『アイ★チュウ』中国版の貢献により、『A3!』中国版につきbilibili社との契約が決定した背景がございます。

また『A3!』中国版のロンチが決まっていないという指摘がありますが、既に契約締結済みでMG(ミニマムギャランティー)を受領しており、ローカライズの作業も順調に進んでおります。ウェル社はゲームアプリに関する中国特有の配信の仕組みを理解しておらず、ウェル社の調査不足となります。

さらに『アイ★チュウ』の今後の展開につきましては、アプリの大幅アップデートを控えております。

周辺事業では、11月25日にZepp Tokyoで開催される「Live!! 『アイ★チュウ』 ザ・ステージ」、12月9日に日テレらんらんホールで開催される「POP'N STAR CARNIVAL!」は既にチケットが完売しております。

(5) 『蒼焔の艦隊』 関する主張について

『蒼焔の艦隊』に関しましては完全オリジナルタイトルですので、即時大ヒットにはなりにくいタイトルとなります。

現在、GvG(「Guild vs Guild」の略であり、オンラインゲームにおけるプレイヤーの集団同士が戦闘を行うこと)の導入を12月のサービスに向けて開発を進めております。

配信サービス開始の初月売上は業績予想の想定を超えており、『アイ★チュウ』の売上を上回る月もあり、『アイ★チュウ』、『A3!』に続く収益の柱に育ってきている形となります。

(6) 『A3!』 今期予想収益の主張について

ウェル社のレポートにおいて、

『A3!』 上期純利益 898 百万円

『A3!』 通期利益 1,796 百万円

との記載がございますが、iOSセールスランキングをご確認いただけます通り、事実とは全く異なり、

ウェル社の調査不足を示すものとなります。

ウェル社のレポートは、断片的に都合の良いデータを用いた、事実とは異なるレポートであります。

また、リリースするゲームはすべて大ヒットでないと駄目だという論調ですが、安易にヒット作を出せるということはなく、リリースするゲームをすべてヒットさせられるような市場環境ではありません。

リベル社は、ヒット率を上げるために開発開始時にセールスランキング 100 位を目指してゲーム開発を進めております。セールスランキング 100 位に入れば月商 1 億円視野に入れることができ、リベル社は他社に比べて経済的に強固な体質を持つ会社でありますので確実に利益を出すことができます。

投資家の皆様には冷静な判断をして頂き、日々ユーザーに対して最高のエンタテインメントを提供するために尽力しております若きクリエイターを応援していただけますと幸いです。

来週にかけて『A3!』『アイ★チュウ』『蒼焰の艦隊』の展開につきプレスリリースを積極的に出していきますのでご期待ください。

2. その他ウェル社調査レポートの項目に対する見解

(1) ” 当該ゲーム以外に同社に近い将来ヒットが期待できる作品はなく” との記載について
作品は無いと断定されていますが、開発中でリリース予定のタイトルは多数ございます。

(2) ” 過去 3 年間の M&A の実績も失敗続きである” の記載について

2015 年 6 月に子会社化したリベル社がグループ内での主力タイトルとして育った『A3!』を自社開発してサービスしております。

また、同じ 2015 年 4 月に子会社化したファーストペンギン社についても、毎年着実に利益を上げており、貢献しております。

(3) ” 収益もキャッシュフローも改善の見込みは薄い” との記載について

上記についても調査会社が調査されて書かれたとは考えづらい記載になりますが、収益面では 2014 年 12 月期から毎年増収を確保しております。

キャッシュフローについても営業キャッシュフローは 2015 年 12 月期に 2.2 億円のプラスに転換し、2016 年 12 月期は 3.6 億円のプラスで、今期の 2017 年 6 月末の上半期では 11.3 億円と更に増えております。

(4) ” 監査法人を、日本の 4 大監査法人である新日本有限責任監査法人から、監査法人アヴァンティアという小規模な監査法人に変更する方針であることを発表した。この監査法人の変更自体が危険信号である。” との記載について

監査法人アヴァンティアに変更した理由は、監査法人が大きくても様々な不祥事を起こしているの、監査法人の大きさだけでメリットにはならない時代になっていると考えております。

よりコミュニケーションがしっかりと取れて、投資家に誤解を招かない形での開示を行っていただけることを主眼に監査法人を選定しております。

(5) ” 2016 年度に買収が 1 度も行われなかったにも関わらず、2017 年 3 月にアエリアが監査法人を 4 大監査法人から中小企業に変更した後の数か月の間に極めて多数の買収を行った行為が非常に疑わしい。” との記載について

2016 年度は 2015 年に買収した各社が貢献は開始したものの、株価が低迷しておりましたのと、効果が見いだせると判断した案件がございませんでしたので、結果的には買収は 1 社も行っておりません。

監査法人の変更前から買収は行っていましたので、監査法人の関係は買収の判断には一切関係ございません。

(6) “2015年度、2016年度ともに、アエリアは企業買収時の取得原価の配分に関し、財務報告に係る内部統制は有効ではないと、関東財務局へ報告している”との記載について

前期末の決算短信開示後のチェックの段階で一部子会社のPPA（買収後取得原価配分）評価が漏れているのを発見し、決算短信修正の開示をしたことにより内部統制が有効ではなかった旨を報告しました。

ただし、同じ書面に付記事項として上記不備に対する是正措置を実施し内部統制報告書提出日までに改善したことにより、内部統制は有効である旨を記載しております。

また当時の監査法人である、新日本有限責任監査法人による内部統制監査報告書においても適正意見を頂いております。

(7) ”財務会計基準機構に加入していない”との記載について

赤字が続いており、リストラを断行していましたので、財務会計基準機構の年会費もコストセーブの対象として見ておりましたが、投資家に誤解を与えてしまいますので早期に加入申請いたします。

以上